市民プレス
SHIMIN PRESS

7月5日　第45号

発行人　特定非営利活動法人「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作・印刷　デジタル工房
FAX　048（476）9111
〒353-0004　埼玉県志木市本町5-19-15

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

-PAGE 1　高層ビルの建設を巡って
大和田囃子とはだか神輿　志木の夏祭り
クールな日本文化に目を向けよう！

-PAGE 2　この人長井長義　その二
江戸で医学を学び、アメリカ経由ドイツへ

-PAGE 3　Bird's Eye 東京もの語り
景観 隅田川の橋梁 その四 佃大橋

-PAGE 4　ニュータイムス社5周年を祝う
地域の先駆 町立志木商の追憶 その四

志木市本町5丁目、東口出口から徒歩3分
・・・・・高校生の通学路で・・・学生寮の建設はじまる

高層ビルの建設を巡って

都市の整備に繋がるか？

悩ませる突風、ビル風！

朝霞、志木駅周辺では、高層ビルの建設によって、あたり一帯は、強いビル風に悩まされている。雨のときは傘がさせない、砂埃が飛んでくる。何とかならないか。

駅に近い大規模商業施設は、通勤する市民には欠かせないものではあるが、都市整備は、混在する低層の住宅、商店との調和をはかりつつ進めるべきだ。

先年、志木駅前に「丸井ファミリー」が竣工したとき、屋上から眺めることができた遠景は、近くに建設された高層ビルによって妨げられてしまった。

しかも高層ビルの建設には、巨大なクレーンの倒壊など、事故が頻発している。工事関係者のみならず、歩行者や住民を巻き込んで起る。恐ろしいことである。

右は「丸井」の屋上から荒川流域を眺望

「大和田囃子」と「はだか神輿」

大和田氷川神社で奉納される囃子と神輿は地域の人々によって大切に引き継がれている伝統芸能。どちらも新座市指定文化財。「はだか神輿」は、白ふんどし・白足袋・白腹巻の若衆たちが、神輿を高く持ち上げたり、地上すれすれに落としたりしながら、神社の境内や外を練り歩く勇壮なもの。今年は7月24（金）、25日（土）。

締めくくるのは・・・

志木の夏祭りは宗岡から・・・

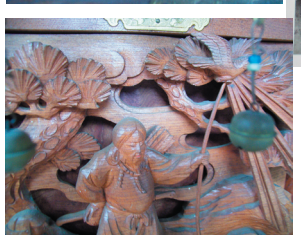
宿組の神輿は、地元の宮大工二代の手作り

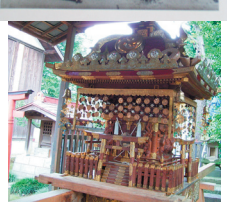
トップを切るのは、7月12日（日）、宿組八坂神社祭礼（中宗岡二丁目「天神社」）、産財八坂氷川神社夏祭り（中宗岡二丁目「氷川神社」）、つづいて18日（土）下之宮氷川神社夏祭り（下宗岡四丁目「氷川神社」）。

志木市夏祭りの最後は、18（土）、19（日）両日にわたる敷島神社祭典（本町二丁目「敷島神社」）である。

夕刻から夜間、志木駅前大通りは車両通行止めとなり、お囃子の舞台と露店商が連なって、引きも切らぬ見物客で賑わう。

宿組の神輿「一之宮」の木彫りは神武天皇と金鵄、天照大神と岩戸の舞の神話、金物は志木市「中野金物店」への特注品で、地元の名工、小日向親子が製作して完成させた。





同親子二代の建設になる家屋は少なくないが、現存するのは、志木市本町二丁目に所在する「朝日屋原薬局」で、そのうち七棟は国登録文化財に指定されている。

「敷島神社」の祭礼！

＜東上沿線きっての華麗な大神輿＞

かつての志木市本町は、醸造、肥料、呉服、雑貨、履物などの大店が軒を連ね、あきない（商業）のまちであった。

神輿もその財政的な力でつくられたことは間違いない。華やかな敷島神社の祭礼は、戦前の賑わいをいまに蘇らせる。

西欧化された現代に、新しい風が吹く！

クールな日本文化に目を向けよう！

この人 長井 長義

その二

江戸で医学を修業

慶応四年（1868）（改元されて明治元年）、長義は二十四才、藩令により長崎より帰藩したのち、明治政府の議定官として江戸に向う蜂須賀侯の軍医として随行、船で江戸に着いた。一旦郷里に戻ったが、明治二年江戸に戻って蘭学の勉強をはじめた。幕府からオランダに派遣され、帰朝したばかりの伊東医師の下で彼は学んでいたが、間もなく伊東が侍医に任ぜられ、教授する余裕がなくなってしまった。そこで長井は神田和泉橋の大学東校に入学し、医学を修行することになった。

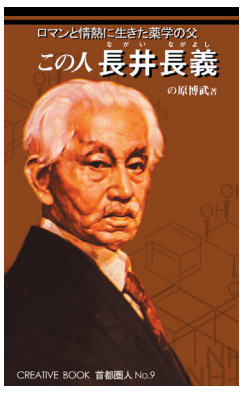
先輩の勧めにより、本草学、薬剤学の基礎となる理化学を学んだが、勉強家で品行も正しいことから、間もなく少寮長に任官して、生徒の教育と世話を命ぜられた（下段右は当時の写真）。

明治政府第一回海外留学生として

明治政府は明治三年（1870）第一回海外留学派遣を発表した。長井ら十一名。きびしい選考過程を見守っていた長義は、合格者となったことを知り、涙したという。

渡航はその年の十二月八日、第一回の国費留学生一行は、すでにドイツに渡航しているものを除いて九名、長井は郷里徳島に別れの挨拶にいったため、乗船に間に合わず、次の便まで待たされることになった。軍医学校長、陸軍医総監などを歴任し、当時医学界に君臨していた石黒忠悳の好意によって長井は、アメリカを経由してドイツに向い出航することができた。ときは明治四年（1871）早春の候であった。

クリエイティブ・ブック は、NPO市民フォーラム」が編集、発売元は「ブッキング」、全国書店で発売中。「アマゾン」、「楽天ブックス」などのネットでも購入できます。



「首都圏人」第9号
幕末に生まれ海外へ留学
化学・薬学の基礎を作った
ロマンと情熱の志士
「この人長井長義」
の原 博武 著
208ページ新書版　定価 945円
明治政府初めての海外留学生のドラマに充ちた米欧見聞書翰を初公開
ライン河畔で乙女への恋、帰国後漢方薬のマオウから「エフェドリン」発見の偉業

彼は非常に筆まめで、何事も日記に書き残している。これらはリアルな描写を脈々と後世に伝え、貴重な記録となっている。山科樵作「長井長義先生明治四年欧米見聞書簡」（「薬局」南山堂発行、6巻7号、1955）の一部を現代文で要約してみよう。

両親に宛てたこれらの手紙によって、大陸横断の当時の様子を偲ぶことができ、百三十年前の日本と世界の動向が、驚くほど新鮮に浮かんでくる。

両親への手紙

〈第一信から〉　三月二日　晴　サンフランシスコ港に着いた私共は、朝七時ホテルを出発して船で東に渡り、汽車に乗った。

車両は小さな家ほどの大きさで、十四、五台、多い時は三十台も連ね、真っ先の蒸気機関車がこれらを引いて行く。これらの車両を「カー」と言い、連ねたものを「ツレイン」と言う。二つの「カー」の間は鉄環で連絡して運転のために便利にしてある。「カー」の中は左右に二人分のいすがあり、五色のビロードで覆ってあり、美しくかつ快い。また左右はみなガラス窓で、山野の景色が臥していても見える。寝台車（スリーピングカー）は夜になれば椅子がベッド（臥床）になる。天井をおろして棚にするとこれもベッドになる。

料金は距離の遠近で異なり、各駅で切符（手形）を買い、車内では一切金銭は取り扱わない。寝台車の料金以外の「サンフランシスコ」より「ニューヨーク」までの切符は横浜で買ってあり、約百十二両だった。「カー」にはおよそ五十人は乗ることができるが、一等車の客はこの半分しか乗っていない。「スリーピングカー」には前後に男女の大小便所、洗面する水と洗面器（水鉢）、石鹸、タオル（手拭）、櫛、鏡などが備えられている。

車の行程は大抵日本の一時（約二時間）に三十六丁（約四キロ）を基準に考えると（訳注：人力車のことか？）、汽車の速さは三十倍である。早い時は窓外の草木も見分けることが出来ない。「サンフランシスコ」より「ニューヨーク」まで二千余里（約八千キロ）を七日間で往く。その道中には山もあり、川あるいは谷もあり、山は下を穿ち、その中を通過するときは日中でも真っ暗だ。川や谷を渡るときは木又は鉄橋が架かっている。そこを通るとき窓から見ると谷まで数尋（二、三十メートル）の谷底が開け、目が眩み身震いする。

食事は駅で汽車から降りて取る。汽車が駅に着く前にボーイ（小使）が食事を持って来る。ボーイは上等の車両には一人づつ付く。大抵食事の時間は二十五分だ。この食事のほかに百間ごと（約百八十メートル）に数回休む。これはその駅に降りる人がいるか、乗る人がいるか、或いは汽車に水を補給するとか、油を給油する時間であるから、食事のために乗り遅れたとしても、その一人のために汽車は待ってくれない。発車前には鐘を鳴らすので気を付ける事が肝要。

ワシントンをその夜出発して翌十三日汽車でニューヨークに着く。「ブロードウェイ」（広い道つまり大道なり）の「セントニコラス」（宿屋の名）に宿す。これまでアメリカに在留していた学生達がたずねてきた（百人くらいの留学生が在留している）。十七日まで乗船待ち。

右は、長井長義より遅れること九ヶ月、同じ船で、同じコースを巡回した明治政府特命全権大使岩倉具視の報告書「米欧回覧実記」に掲載された銅版「ブロードウエーの繁華街」

街角には「ポリスメン」（めあかしの類なり）が一尺五寸余りの樫の棒を持ち、始終互いに廻り歩き、乱暴をする人、喧嘩をする人、盗賊、或いは途中にて小便をする者あれば、ただちに捕え、牢に繋ぐことにする。右の事はすぐ起こる事は無いが、人が多いところでは巡回し、四つ角にては夫人、子供、老人等が馬車の事故に引き込まれない様に見張っている。西洋の町には道の左右に樹を植え並べる処が多い。これは健康のために良い事と思う。この日セントラルパーク（市の真中）へ行く。周囲三里ほどある。

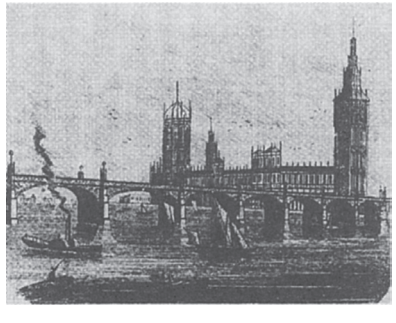
十九日　晴　十二時舟に乗り込む。英国まで同行者は十人、皆日本からの同行人である。四時「ニューヨーク」湊を出帆、海は平穏である。甲板に上り四方を望む景色は美しい。二十日　雨

二十一、二日　晴、二十三日　晴　四日間風もなく、順調に舟はゆくが、舟足速く皆舟酔す。毎日船室にて横たわり食事も船室でする。

〈第三信から〉　四月一日　夜中に雨　夜十時英国西部の港「リバプール」に着く。此の港は遠浅にて岩礁多く、引き潮の時には大きい船は岸壁につけず小舟にて渡る。「レイルウェイホテル」（蒸気車道の宿屋のこと）に宿泊す。最高に美しいホテルである。

翌日午前十一時宿屋の船着場から蒸気船に乗り、夕方五時過ぎ龍動府（ロンドン）の「ロンドンブリッジステイション」に着く。「テアーミニュスホテル（端の宿屋の意味）」に宿をとる。

六日　晴、七日　晴　西洋の都府のどこでも同じことだろうが、ことにロンドンは人も家も多く、昼間は家々の石炭の煙と製造工場の石炭の煙で五、六丁先の人家を見分けることが出来ないうえに臭はたえられない。かつ空気も悪くなる故ロンドンに来た者は病を起こす事多く、ロンドン人とて健康を害する事多し。それ故富める者は昼間は町の中の店に出て夕方になれば郊外の別屋敷に帰る由である。近い場合には馬車で往復し、少し遠い場合は地下に蒸気車あり（地下道は近年の発明なり）。これで行けば二、三十里も一時間で行ける。実に便利だ。



右は『米欧回覧実記』に掲載された銅版、左：いまも変らぬ「テームズ川とウェストミンスター寺院」

＜第四信から＞　ロンドンの盛んな事と蒸気機関が盛んに使われている事は御推察下さい。ロンドンの市内を流れる「テイムス河」という大河があり、江戸の隅田川のようだ。この川は大小蒸気船の出入りもある。実に盛んである。橋も数々ある。この河の底を掘って向こう岸に出る道があるが、時間がなくて見に行けない。このほかにロンドンには色々珍しい事があり、書き尽くすのは難しい。

九日　雨　夕方七時に、見送りに来た三人に別れを告げ、上野、南貞介と同じ汽車に乗る。夜半に「ドバ」（ドーバア）に到着して船に乗り、翌朝大州（ヨーロッパ大陸）に着き、車に乗り替え、快晴で展望が素晴らしい。

ベルリンに着いて

引き続き以下に、長井が昭和三年ベルリンで書いた自叙伝（独逸語、高野一夫訳）の一部を以下に要約する。

長井はアメリカを経由してロンドンに着いたが、ドイツ語は自由ではなく、ドイツの地理にも暗かったので、ロンドンからベルリンに向うさいに不安を抱いていた。丁度この時、のちの公爵「伊藤博文」がロンドンにいて、以前から知り合っていた事を思い出した。そこで伊藤を訪ね、ドイツに行くにはどうしたら良いかを尋ねた。伊藤は「一週間待てば、丁度フランクフルト・アン・マインに行く日本人が二人いるから、この人達と一緒に行ったらよかろう」と言う。伊藤は、フランクフルト迄の切符二枚と長井のためにベルリンまでの切符を買ってくれたので、其れまでロンドンに滞在した。

三人で大陸に渡って、ベルギーを通過、ケルンを過ぎてボンまで来たとき、ベルリンに行くには、ケルンで乗り換えねばならなかったことを知った。ついに同行の二人とはフランクフルトで別れなければならなかった。

さて四人が腰掛ける一等車の個室に乗り込むと、すでにドイツの若い軍人が席を取っていた。恐らく日本人は初めてではないか、あまりにじろじろ見られて彼は気分を悪くした。自分の席を動けず、緊張と長旅で長義は食欲をなくした。一度も飲物を買うこともせず、弁当も食べられず、空き切った腹を抱えて、ようやく待望の目的地ベルリンの停車場に到着した。

ベルンブルガー・シュトラッセ八番地、ここが日本から頼まれてきた青木周蔵の住所である。青木氏はドイツ婦人と結婚し医者になるつもりであったが、公使になってベルリンに長く駐在していた。目的の家についてベルを押すとドアーを開けてくれたが、青木氏は旅行中とのこと、しかし長井のことは承知しているというので、荷物を運び込んでくれた。出迎えた人は、ここには宮様（北白川宮能久親王）が滞在中であるという。そして殿下は、日本の最新情報を知ることを喜ばれるからお目に懸かれという。畏る畏る伺候すると、日本のことを御下問になり、青木は留守中だが、その間彼の部屋に住まって居れと仰った。

青木は出張から帰ると、長井にタウベン・シュトラッセ十五番地にあるホルツエンドルフ夫人の下宿を斡旋した。この方は高名な経済学者ホルツエンドルフの叔母さんに当り、青木は、長井にとって安心できる下宿と考えたようだ。

当時のベルリン市街

子供のない気のいい老夫婦は、長井を子供のように可愛がり、まだ洋服の着方もよく分からぬ長井に、ナイフやフォークの使い方、洗面器や石鹸の使い方まで、手に取って教えてくれたという。彼女はアンデルセンやグリムの童話を読んで聞かせ、後年長井は、彼のドイツ的教養はこの老夫人に俟つ所が多かったと書き記している。ホルツエンドルフ夫人は、宗教や芸術についても長井に話して聞かせ、芝居にも誘った。

ベルリン大学に入学

ドイツに来てから一年が経ち、長井は明治六年（1873）ベルリン大学に入学した。

Bird's Eye 東京もの語り

景観 隅田川の橋梁 その四

佃大橋

「佃大橋」は、築地明石町と佃島とを結ぶ、長さ220メートル、幅25メートル、橋桁はすぐ上流にあった石川島播磨重工業佃島工場で製作され、現場架設も同社によって行われた。桁下から水面までの間隔を勝鬨橋と合わせたため、取り付け道路が高架のように高く、また橋の中心線が岸壁に対して62度という斜めの角度をもっている。

この橋は、昭和三十九年（1964）十月に開催された第十八回オリンピックの関連道路として建設された。この東京オリンピックは、太平洋戦争で荒廃した日本が急速に復興した姿を内外に示す絶好な機会となり、浜松町ー羽田間のモノレールをはじめ、東京ー大阪間の新幹線、首都高速道路1・2・3・4号線、環状7号線が完成した。

大橋の左岸の佃島は、徳川家康が浜松にいた頃、摂津国の住吉神社に詣でた折りに佃村の漁師から受けた好意に報い、漁夫を江戸に呼んで漁業権を与え、故郷の住吉神社を祀って佃島と名付けたという歴史がある。

江戸時代には度々火災が起ったが、慶応二年の火災を最後に、関東大震災、戦災を免れたため、江戸時代の面影が残る。佃煮発祥の地として知られ、古い構えをもつ店がいまも健在である。

「佃の渡し」は、佃の漁師が正保二年（1645）手漕ぎの舟で始めて以来、隅田川最後の渡しとして親しまれていたが、大橋の開通によって三百二十年の歴史を閉じた。また佃川を埋立てて佃大橋の取付け道路となったので、佃島は月島と地続きとなり、佃川に架かっていた佃橋は廃橋となった。住吉神社裏手の船溜りに取り残された佃小橋が、わずかに昔日の面影を残している。

住吉神社大祭

佃島は江戸湊の入口に位置しているので、住吉神社は、海運業をはじめ多くの人々から海上安全、渡航安全の守護神として信仰を集めてきた。またその南の月島、勝どき、豊海、晴海と埋め立てが行なわれてからは、全地域の氏神様として信仰を集めている。

住吉神社の例祭は毎年八月六、七日に行なわれるが、昨年のように、三年に一度の本祭りでは、期間も土曜日曜を含む四日間、獅子頭、神輿の宮出し、神輿を船に載せて氏子地域を廻る船渡御が行なわれる。

江戸時代から伝えられた大幟りが立てられ、龍虎、黒駒の獅子頭も飾られる。獅子頭宮出しでは、揃衣の若衆が獅子頭の鼻先めがけ殺到する。住吉神社の宮神輿は重量感をもった「八角神輿」で、天皇の高御座を擬したと言われ、製作されたのは、正保九年（1838）である。

安藤広重「名所江戸百景」の「佃しま住吉の祭」には、「住吉大明神」と書かれた大きな幟が立てられ、裸の若衆に担がれた神輿が海中に入る様が描かれている。

ニュータイムス社5周年を祝う

去る4月27日(月)、志木市民会館パルシティ2階で、幅広い地域の後援者が一堂に集り、岩下隆社主の5年間にわたる活動を労い、将来の地域の発展に寄与されることを期待して激励した。

記念祝賀式には、地元選出の国会議員、埼玉県知事（代理）、志木市長、元市長、志木市議会議長、志木市商工会長ほか、政財界、商店会、メディアの面々が集い、祝辞が述べられた。そのあとには、オペラ歌手のアリアが熱唱され、また箏曲が奏でられ、尽きざる御馳走を楽しみつつ、一同談笑、熱気は冷めることが無かった。

ニュータイムス社の後援会の結成が提案され、同社を支持する態勢が一気に進展した。

決意を語る若き社主の岩下さん

左：長沼市長の挨拶、右：御来賓

右上：イタリアオペラのアリアを歌う「ませださよ」さん。右下：箏曲を演奏された岩下博苑さん。　左下はぶるっ☆べりぃの演奏

地域の先駆だった！

町立「志木商業学校」の追憶（その四）

埼玉県志木商業学校は、旧新座郡(志木・新座・朝霞・和光・富士見市一帯)下に人物の輩出が遅々としていたのに鑑み、大いに人材を出して郷土の風教(徳によって人々を教育すること)を振興しようとして、昭和十四年(1939)二月、志木町町会に於て、町長村山弥七氏の下で中等学校設立の議が起った。

経費の捻出、設立認可、敷地選定の問題等幾多の困難を克服し、同年三月、天文年間大石信濃守の所領であった城趾で、城代家老、宮原左膳綱輝氏末裔が所有する、埼玉県北足立郡志紀町大字志木字城二六一〇番地、長勝院の東方の台地を学校敷地とするの段取が成った。そこで関係官庁との折衝においては、猛烈な運動を極めた結果、同年三月三十一日実業学校令による、生徒定員各学年五十名の町立甲種五年制商業学校が、志木小学校校舎内に、同校校長宮原吉之助氏兼任事務取扱で設置され、同四月七日開校を見るに到った。

昭和十四年十一月二十二日、生徒一同に御親閲(奉安殿への御真影、教育勅語か?)を拝受、昭和十六年四月二十九日校旗制定された。昭和十八年三月三十一日、専任校長として岩本武雄氏着任、時の町長西川武吉郎氏は校舎の建築促進に力を致し、昭和十九年四月一日定員を増加して、第一学年百名募集となり、着々商業学校としての基礎は堅固となった。

註：徳丸五郎氏の記述を口語に。

志木小学校の卒業写真(昭和14年)　この中から7名が第一回生として志木商業学校に入学

最前列中央には、志木商業設立の核となった村山弥七、宮原吉之助、その左右に当時の名士、浅田熊造、高須七三郎、椎木医師ほかが並ぶ。

昭和二十九年 志木小学校の改築

志木商業が開校時に使用した志木小学校の旧校舎(明治時代から引き継がれ、上の写真のモダンな校舎の背後に在った)は、昭和二十九年(1954)鉄筋に改築され、平成十五年(2003)現在の校舎に建替えられる迄使用された。

志木町立志木小学校改築工事概要

一、位置　埼玉縣北足立郡志木町
一、起工　昭和二十九年二月二十六日
一、竣工　昭和二十九年八月二十五日
一、様式　現代式
一、構造　鐵筋コンクリート造
一、階数　地上三階　塔屋付
一、面積　延面積　四三二、〇坪
各階面積
一階　一五七、八坪
二階　一三七、六坪
三階　一二八、一坪
塔屋　八、五坪
合計　四三二、〇坪

工事関係者
一、設計及監理　加藤清作
一、建築工事　丸石工業株式會社
一、附帯設備
電氣工事　関東電氣工事株式會社埼玉支社
給排水工事　丸石工業株式會社

志木町長　井下田四郎

地域情報

市民文化財講座
新河岸川の舟運と引又（志木）河岸

講師　高木　文夫さん
ふじみ野市上福岡歴史民族資料館元館長

とき
7月18日（土）
午前10時～12時

ところ
志木市立いろは遊学館3階
第二研修室

主催　志木市郷土資料館
☎048・471・0573
入場無料

お知らせ

このたびニュータイムス社のご好意により、同社の情報誌「ニュータイムス」をご購読されている読者に、本誌「市民プレス」を同梱・配布して戴くことになりました（お申し込みは「ニュータイムス社」TEL. 048-486-6138　FAX. 048-471-3240　E-mail, newtimes-net@nifty.com にどうぞ）

本紙発行日の変更：本年一月から年四回発行となります（一、四、七、十月、各月五日）

左は「ニュータイムス」号外

日本原産の「ぎぼうし」

特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

読者の「オピニオン」(意見・感想)をお寄せ下さい。

TEL090（3048）5502
編集部　原宛にどうぞ